

全科協ニュース

1977年5月1日発行
(通巻第35号)

全国科学博物館協議会

東京都台東区上野公園

国立科学博物館内

〒110

Tel. 03-822-0111(大代)

おもな内容：◇最近の米国のプラネタリウム 神奈川県立青少年センター 河原郁夫 ◇昭和51年度常設展示更新の概要 市立名古屋科学館 ◇化学プラントの安全実演装置 産業安全技術館 ◇開館40年を迎えた大阪市立電気科学館 ◇レコード発明100年記念 '77エレクトロフェア 科学技術館 ◇開館20周年を迎えて 天文博物館五島プラネタリウム ◇会員館紹介 岐阜県博物館

【外国の博物館】

最近の米国のプラネタリウム

神奈川県立青少年センター 河原郁夫

昨春秋、米国の8カ所ほどのプラネタリウム関係施設を見学してきたので、そのことについて少し述べてみたいと思う。

プロジェクション・ギャラリー

新しくできたプラネタリウム館（ツーソンなど）の多くは、ドーム壁を二重にしたプロジェクション・ギャラリーを持っていて、そこに100台から200台ほどのプロジェクターを設置して、それらを上手に組み合わせてダイナミックな演出を行っていた。

昔からある古い館ではプロジェクション・ギャラリーが増設できないので、プラネタリウムの架台付近に数多くのプロジェクターをところせましと設置しているところや、ドーム壁面に棚をつけて、そこにずらっとプロジェクターを並べて使用しているところもあった。

プロジェクターには、ズームプロジェクター、ツィンプロジェクター、4連プロジェクターを始め、16mmなども上手に取り入れていた。16mmはフィルムをエンドレス

につないで数秒間の動きある画面を見せるために使っているところもあった。そのほかに、1回の演出中に1カットだけ使う単独のプロジェクターに回転や移動ができるようなアタッチメントを付けたものを、数多く上手に組み合わせて使用していた。

これらの数多くのプロジェクターは複雑な組み合わせをして使うために、信号用のテープに組み込んで、オートで行っているところが多かった。

演出について

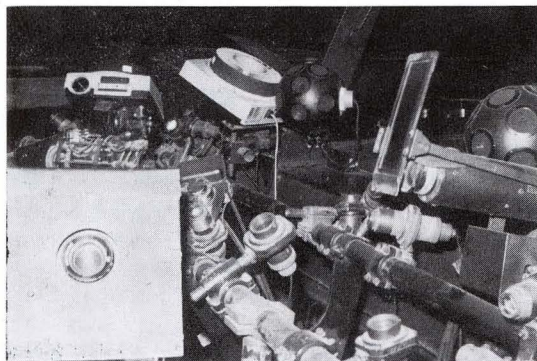
私の見た館の半数ほどは、解説の全部をテープで行っていたが、他の館でも解説の1/2から3/4ほどはテープを使い、始めと中間のつながりと終わりくらいを肉声で行うという方法をとっていた。

演出の方法もバラエティーに富んでいて、日本の多くのプラネタリウムで行っているような標準的なパターンのところもあったが、多くのところでは、最初からアッと驚くようなことで注意を引きつけてから始めるような工夫をしていた。もちろん途中でも何回となく引きつける場面を作っておいて、観客を引っぱっていくような工夫もしていた。

また、B. G. M. もふんだんに取り入れて楽しめる演出を考えていた。スピーカーを数多く組み合わせて使ったり、移動できるようにしたりして、迫力のある動きのある効果音が出せるように工夫しているところが多かった。B. G. M. 用のテープは1/2インチや1インチ幅のものを使っているところが増えているようである。

演出の時間は40分から50分が多いようであった。

ところによっては、後半で全天全周映画を取り入れているところもあった。



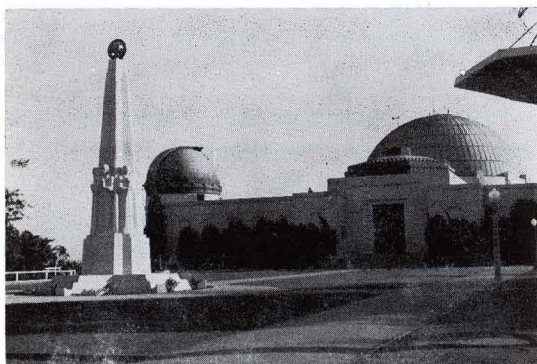
架台付近に設置された数多くのプロジェクター

米国の多くの館では、一つの演出を2カ月から3カ月も使っていたが、その内容が非常に凝っているために、一つの演出を完成させるために3カ月ほどかけているようである。日本の場合だと、一般向けの演出は毎月替わるので、年に12本作る必要があるが、米国の場合には年に5、6本作ればよいので、ゆっくりと時間をかけて良いものができるようである。

ディレクターのほかに、アーティストや電気関係の技師まで入れて十数人のスタッフがいて、その人たちがおのおの分業で、数カ月前からそのための準備をしているようである。

また工作室も完備していて、種々の機器の改良や修理はもちろん、新しいプロジェクターの製作まで行っているところもあった。

このようにスタッフがそろっているうえに、作業室なども完備しているので、非常にうらやましいと思った。



グリフィス天文博物館

椅子

プラネタリウムにはつきものの椅子は、日本ではほとんど背板が動いて何度か傾斜するようになっているが、米国のは逆に、ほとんどの館の椅子の背板がある角度で固定してあった。昔は背板が動くようになっていたそうであるが、ギイギイこいで音を出したり、また破損しやすいために固定式にしてしまったようである。

また、新しい館では、U字形の一方方向の座席が目立った。

レーザーリウム

最近の米国のプラネタリウム館の主なところではレーザーリウムを行うところが増えてきたようである。

私もロサンゼルススのグリフィス天文博物館に夜遅く行って見たが、レーザーリウムの始まる1時間ほど前から延々長蛇の列ができていたのでびっくりした。若いカップルが多く、雑談を楽しみながらその入場を待っていた。またその人たちを目標にアイスクリーム売りのおばさんがいて、結構繁盛しているようであった。

レーザーリウムの投影中は非常に熱狂的で曲が終わるたびに、ものすごい拍手がおこった。私は京都でレーザーリウムを見たことがあるが、同じような内容でも、ずいぶん感動の仕方が違うように思われた。米国ではこのレーザーリウムはまだまだ盛んで、年々常設館が増えていようである。このような日本と米国との相違は国民性によるのかも知れないが、あるいは立地条件等によるのかも知れない。

レーザーリウムの終わった後、ほとんどの人はロサンゼルススの夜景を一時楽しんで下山するようであった。

第6回博物館事業研究会終わる

第6回全科協博物館事業研究会は、「科学博物館における展示の理論と実際——展示の実施の段階を中心として——」を研究テーマとし、さる3月15日から17日までの3日間実施された。会場は国立科学博物館で、参加者は19名であった。

第1日目——全科協理事長が海外出張中であつたため代理として国立科学博物館五十嵐淳次長のあいさつ、参加者自己紹介、日程説明の後、研究討議に移った。はじめに、前年度の研究会で実施した展示の企画段階についてまとめを行った。次に展示の実施段階について、まず施工業者の立場から乃村工芸社の石原堅次チーフデザイナーに具体的話題提供をしていただき、実施設計にあつた問題点について話し合いを行った。

第2日目——前日の討議に引き続き、博物館側の立場から実施段階の問題点について話題提供を行い、国立科学博物館の展示更新作業中の現場（植物分類展示室）において活発な討議がかわされた。さらに午後は会場を乃村工芸社に移し、それぞれ担当者の親切な説明を受けながら、映画やビデオによるディスプレイや、実際に展示

資料を製作する過程を工場の各部門で見学した。

第3日目——最終日は参加者の経験、各館園の現状を紹介しながら、あらかじめ準備されたテキストの項目別に展示の実施にあつた問題点を討議し、さらに展示を円滑にすすめるために留意しなければならないことについて話し合った。

今回の研究会によって、博物館としては企画段階はもちろん、実施の段階にあつても施工業者に負けない情報、知識が必要であり、また、完成した展示資料のメンテナンスも業者にまかせるだけでなく、自分たちで管理運営していかなければならないことがはっきりした。このための展示に関するデータなどは全科協ニュース等を通して連絡し合い、たとえば経費節約の意味からも共通に使うことのできる写真パネル、文字パネル、レプリカの原型などについて便宜的な処置がとれるのではないかという要望もあり、今後は相互に研究を進めようということになった。

なお、研究会の配布資料は、本ニュースと共に各館園に1部ずつお送りします。
(事務局)

【新しい展示】

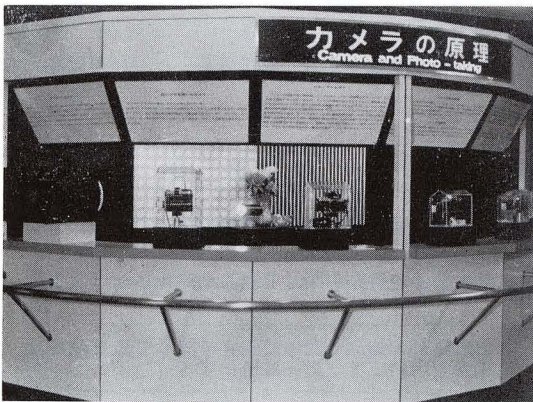
昭和51年度常設展示更新の概要

市立名古屋科学館

当科学館では、常設展示の更新と年1～2回の特別展示の開催という2本の柱で、展示活動の充実に努めているが、昭和51年度分の常設展示更新については、光学部門4点、力学部門2点、熱学部門1点、機械工学部門2点、計9点の展示品を新たに製作、公開した。特別展示については別に紹介するとして、常設展示更新のあらましを次に記すことにする。

<カメラの原理>

現在広く利用されているカメラの基本原理のうち、結像、シャッターとしぼりによる露光時間の調節、レンズの画角について、観覧者自身で観察、実験できるようにしたものである。シャッターについてはしぼり優先カメラ、しぼりについてはシャッター優先カメラを使用し、画角の実験では、標準、魚眼、望遠の3種のレンズによる画角の範囲を観察できるようにした。



<顕微鏡のいろいろ>

代表的な生物顕微鏡、金属顕微鏡、偏光顕微鏡3点を展示し、興味深いサンプルを観察できるようにしたもので、偏光顕微鏡については試料用ステージが自動的に回転するようになっている。また顕微鏡における光路、カラーの顕微鏡写真も展示解説してある。

<光のふしぎ—偏光と複屈折—>

レーザー光を使用して方解石の複屈折現象を興味深く展示したもので、あわせて人工の偏光板により偏光現象を実験できるようになっている。

<ホログラフィ>

レーザー光再生ホログラム並びに白色光再生ホログラムを展示して、物体の立体像を比較観察できるようにしたものである。

<力の合成>

金属製のてこ、組合わせ滑車実験装置により、力の合成について実験、理解させるとともに、ジャイロスコープに関しては、アルミニウム製トランク内にジャイログ

まを設けて高速回転させ、回転軸の方向性について直感的に理解できるようにしたものである。



<回転と加速度>

回転運動に伴う現象のうち、回転半径、回転速度、遠心力の大きさの関係については、回転円盤、ガバナーなどで実験させるとともに、同一質量で異なった形状、半径の回転体の慣性モーメントの比較実験、斜面上の等加速度運動の実験もできるようになっている。

<熱と仕事>

熱を仕事にかえるしくみを、熱力学の法則、永久機関などを基礎に分かりやすく解説し、あわせて熱ポンプ、熱機関の可動模型を展示、その原理を説明している。

<応力とひずみ>

同一断面積で形状の異なる材料について、荷重と形状、生ずる歪（ひずみ）の関係を比較実験させるとともに、材料内部に生ずる歪については、光弾性実験装置によって実験できるようになっている。

<機構のいろいろ>

機械要素として重要な役割を果たしているねじの原理を実物、模型等で解説し、その種類、応用等はビデオテープレコーダで説明している。機構については、リンク、巻掛伝導装置を実物、可動模型により展示解説している。

(佐伯平二)



【新しい展示】

化学プラントの安全実演装置

産 業 安 全 技 術 館

爆発災害は不意の出来事であり、異常事態が起きたときにいかに迅速に正しく対処できるかが事故の拡大防止に大きな関係があると言える。

今度、当館で新たに製作した「化学プラントの安全実演装置」は、化学プラントの一部分を構成する反応塔をモデルとして、温度上昇速度の急激な変化による異常発生の場合の正しい操作方法を実演させるように構成してある。一般に、石油化学などの装置工業では、異常を検出して、異常信号回路から出る信号により自動的に対応操作を行う機構を設けるのが普通であるが、この装置では手動による場合を取り上げているものである。

この実演装置は、反応塔の一例として、原料エチレンに水素を添加する工程において、反応熱の温度上昇速度が平常より急激に増加したことによる異常の発生とその対応操作をつぎの表の3段階に設定してある。

操作は、正面パネル上に表示される現象に対応して、

押ボタンを押すことにより行うこととなる。

対応操作とその判定は、下表のとおりであり、対応操作の終了後に、パネル上に表示される。

なお、押ボタンは、次の8つが配列されている。

①スタート ②点検 ③水素の緊急遮断弁〔閉〕 ④水素の緊急遮断弁〔開〕 ⑤エチレンの緊急遮断弁〔閉〕 ⑥製品の緊急遮断弁〔閉〕 ⑦緊急脱圧弁〔開〕 ⑧リセット

この装置の問題点として、カチカチとやたら押ボタンを押す音が聞こえてくるが、操作方法の説明がよく理解されていないかららしい。テープなどによりわかり易い説明を行うとか、また、この装置には表現できなかった「なぜ、この対応の仕方」「優」になり「良」「可」「不可」になるのかの理解も含めて、解説の仕方にもう一つ工夫を考えているところである。

皆さんの御来館を頂き、御批判をいただければ幸いです。(香坂)

反応塔出入口の温度上昇速度	異 常 発 生	対 応 操 作
1. $\Delta T / \Delta t$ が異常になる	異常信号回路により警報装置が働く	反応塔周辺を点検し異常の原因を調べて対策をとる
2. $\Delta T / \Delta t$ がまだ異常を続ける	警報装置が働き続ける	水素の緊急遮断弁を閉じて流入を停止させ点検を行う
3. $\Delta T / \Delta t$ がやはり異常を続ける	警報装置が働き続ける	さらに原料・製品の緊急遮断弁を閉じて孤立化させ、脱圧弁を用いてフレアーに排出する。



	操 作	現 象	判定
1	ボタン①を押す " ② "	装置始動・温度表示窓〔青〕→〔黄〕 点検・処置完了・表示窓→〔青〕	優
2	ボタン①を押す " ③ " " ② " " ④ "	装置始動・温度表示窓〔青〕→〔黄〕→〔オレンジ〕 水素の緊急遮断弁〔閉〕 点検・処置完了・温度表示窓〔オレンジ〕→〔黄〕→〔青〕 水素の緊急遮断弁〔開〕	良
3	ボタン①を押す " ⑦ " " ⑧ " " ⑤ " " ⑥ "	装置始動・温度表示窓〔青〕→〔黄〕→〔オレンジ〕→〔赤〕 緊急脱圧弁〔開〕 フレアスタックへ排出 水素の緊急遮断弁〔閉〕 原料エチレンの緊急遮断弁〔閉〕 製品の緊急遮断弁〔閉〕 操作停止、反応器修正、温度表示窓〔暗〕	可
4	ボタン①を押す 対応操作しない 対応操作をまちがえる	装置始動・温度表示窓〔青〕→〔黄〕→〔オレンジ〕→〔赤〕 爆発・温度表示窓〔閃光〕→〔暗〕 装置始動〔暗〕	不可

(注) 温度計の色は10秒ごとに変わる。

【特 別 行 事】

開館40年を迎えた大阪市立電気科学館

大阪市が大正12年に電気供給事業を開始し、昭和の初期に10周年を迎えた際、その記念事業として電気科学館の建設が計画され、昭和12年3月13日に開館、本年第40回目の誕生日を迎えました。

当時の家電製品といえば、ようやく電灯に加えて、アイロン、扇風機、ラジオが普及したところ、しかし、研究室においてはすでに現代社会に見られる数々の便利な機器の実用化の可能性が打ち出されていたのです。このような電気のもつ未来へのすばらしさを、広く市民に啓発することにより、市民生活の向上と電気事業の発展を目的とした未来指向形のサイエンス・ミュージアムとして「科学館」という名のもとに建設が進められたのですが、ちょうど、欧米へ出張中の電灯部長がプラネタリウムを見学し、その教育効果の大きいことに着眼、この装置の導入を強く進言した結果、急拠設計変更がなされ、東洋で最初のプラネタリウムをもつ施設として、水の都、四ツ橋の川面にその雄姿を現しました。

ここに開館40年を迎えるに当たり、激動の世情の中、風雪に堪えて、その時代の科学技術とともに歩んだ道程を振り返る意味で、この3月12日(土)～4月10日(日)を記念月間として、各種行事を企画実施しました。

1. 40年のあゆみ・資料展〔期間中〕

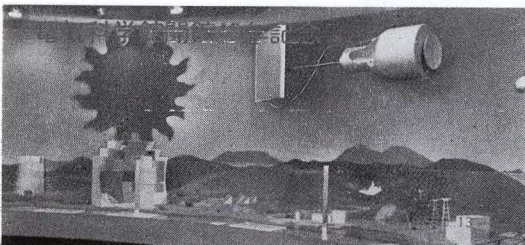
開館、戦争、復興、技術革新など、世相とともに移り変わってきた電気科学館の様相や出来事を、四ツ橋かわいの風情を交えて、折々の写真、事業資料、ポスターなど、歴史的に貴重な意味をもつものを展示して、そのあゆみをたどりました。

2. 全館無料開放〔3月25日(金)・電気記念日〕

開館以来初めて全館を無料で開放しました。当日は春休み最初の日でもあり、早朝より観覧者が殺到、特にプラネタリウムは定員がある関係上、各開演時間とも30分前より1階コンコースに並んでいただき、整理券を発行しての整然とした見学に館員全員であたりました。なお当日の観覧者は延べ4,301名にもおよびました。

3. 記念しおりと記念スタンプ〔期間中〕

エネルギー問題は、今や世界人類共通の難題、そこで



記念しおり (×0.5)



太古の昔より人類にとって最大のエネルギー源である、3階電気館に展示中の太陽エネルギー利用のパノラマを記念しおりとして印刷、また、同時に記念スタンプを作成して、期間中の観覧者25,000名に配布、押印に供しました。

4. プラネタリウム「昭和12年の天界」を投影〔期間中〕

電気科学館が開館した昭和12年3月に、大阪の夜空を飾った天体現象を投影し、当時の人が驚異の眼で迎えたと思われるプラネタリウムという機械のすばらしさを、改めて見直していただきました。

5. 科学映画会〔3月26日～4月7日〕

春休み期間中の毎日2回、「日本のこころ」「イカロスの夢」「地震予知」「水素エネルギー」など上映、現代科学技術思考の一助としました。

6. 豆記者招待「科学館一日取材」〔3月12日〕

小・中学校の新聞クラブの児童・生徒を招待して、現在の科学館のすがたを取材してもらうと共に、さらに未来に向かっての科学館の役割を討論していただきました。

7. エレクトロニクス工作教室〔4月5日・6日〕

小学校5年生以上を対象に、両日とも35名が参加、2石トランジスタラジオの製作を通して、エレクトロニクスのはたらきを学びました。

8. コンピュータ教室〔3月29日～31日〕

これからの社会で活躍する中学生50名が参加、実際のコンピュータを使ってのしくみの勉強と、プログラムを作成しての計算実習を行いました。

以上、記念行事のあらましを簡単に報告させていただきました。期間中の延べ観覧人員は41,615名でした。

(井上貞美)

【特 別 行 事】

レコード発明100年記念
'77 エレクトロフェア

科 学 技 術 館

今年のゴールデンウィークは完全な飛び石休日で、どこか遠出を考えたくともできにくいようであった。それからあらぬか、当館にかぎらず、都会周辺の遊園地や博物館の利用者が、かなり多かったことを耳にしているが、会員館園の皆様の所ではいかがであったろうか。当館では一昨年あたりから、春、夏、冬の休みにかぎらず、ちょっとした特別展を実施するようになり、これをマスコミがとりあげるにより館の知名度がようやく上昇の方向をみせるようになってきた。

今年のゴールデンウィークは、表題にもあるとおり、今年がエジソンが蓄音機を発明して100年、あるいは、フランスの詩人、シャルル・クロが円盤方式の録音原理を発表して100年ということもあり、これを記念して、オーディオを中心とした「エレクトロフェア」を開催した次第である。

内容をかいつまんで紹介する。

エジソンの第1号蓄音機の複製をスタートに、ろう管式蓄音機2台を使って観客に実際に声を吹き込ませ、再生してみせるデモンストレーション。1900年代初期の各種蓄音機を全部実演してみせるコーナー。なつかしいSPレコードによるコンサートコーナー。ここで使ったビクトロラとよばれる蓄音機は来館者に対し、一様に驚嘆の声をあげさせるほどすばらしい音を再生していた。観客の中には電気のコードはどこだ、とか、スピーカは

何を使っているのか、とかトンチンカンな質問が飛び出すほど、今のオーディオ装置より、ある意味ではすぐれているところがあったわけで、小生自身、昔の蓄音機に対するイメージを一変させてしまったものである。それからもうひとつ。

当初我々企画スタッフは、昔のこうしたものに子供たちはあまり興味を示さないのでは、という心配もあったが、これもうれしい方向で裏切られた。スケッチをしたり、写真をとったり、メモしたり、あまりの熱心さに、係員の説明も力がこもるといった有様で、この現象をどう理解すべきか、今職員の論議となっているところである。

こんな当初の心配から、オープン1週間前になって、急転新しい企画が追加された。それは、子供たちにカラオケ伴奏で歌をうたわせ、その場でEPレコードをつくらせてみせ、プレゼントしよう、というものであった。子供たちは最初はにがんでいるが、1人でも参加すると、たちまちわれもわれも、ということで大盛況。トータル150枚ものレコードをつくることになってしまった。目の前でレコードがつくられてゆくこの実演は、子供、大人を問わず大きな関心を呼び、NHKニュースでも放映されるなど、大きな成果を収めたものである。ただひとつ、われわれスタッフの不注意であったことは、カラオケ伴奏に使う音楽の著作権の問題である。企画がオープン間際まで流動的であったのと、音楽著作権に対するわれわれの認識不足から各方面に迷惑をかけてしまった。

博物館においては、時に、既製の音楽を使用したい場合もあるが、必ず一度音楽著作権協会に相談することが後々のトラブルをひき起こすこともなくスムーズに企画を進めることができるわけで、反省と同時によい教訓を得たと考えている。

ともかく、こうしたわけで、今年のゴールデンウィークは当館としては成功裡に終わることができた。

(山田英徳)



開 館 20 周 年 を 迎 え て

天文博物館五島プラネタリウム

五島プラネタリウムは、昭和32年4月、渋谷東急文化会館の8階に創設され、この4月、満20周年を迎えました。立地条件の良さも手伝い、現在までに8,847,000人もの人々に親しまれてきました。

この20年間の天文学、宇宙科学の進歩には目を見はるものがあります。人工衛星打上げ、人類初の月面着陸、また、準星、X線星、パルサーの発見、今またブラックホールが話題になっています。このような目ざましい進歩のなかで、プラネタリウムの使命を改めて認識し、社会の要求に答える博物館であるよう、今後とも努力していく考えです。

過去20年の入館者の動向をみますと、開館当時は、人工衛星打上げの背景と、目新しさもあり爆発的なブームを起しましたが、この時期は特別として、月面着陸など、社会的な関心の高まった出来事、日・月食、火星の接近、彗星、流星雨などの天文現象のある時期の入館者の増加が目につきます。開館後、4、5年は多かった修学旅行の中学校団体の見学が最近少なくなっていますが、この原因に、都内へのバスの乗り入れ規制、駐車場の不足など環境の変化があげられます。また最近では都内、近県に新たにプラネタリウムが設立され、小学校団体の減少も目につきます。入館者の層は、ここ3、4年、家族づれ、小学校低学年生の増加が目立ちます。このような社会情勢の変化による入館人員の増減があげられます



が、そのような外的条件ばかりでなく、内部の地道な活動の大切さも反省させられます。

現在プラネタリウムの投影は、非常に広い入館者を対象とした一般投影、小、中、高校生向きの学校投影、幼稚園アワー、子供天文教室、星と音楽の夕べ、星の会(小学、中学、一般クラス)、夏期天文講座を設け、それぞれ特色ある、各対象に応じた投影を行っています。

投影効果を高めるために、従来の特殊投影機以外に、8mm、16mm映画の導入、時角、天頂目盛、雲、スライドズーム、スカイラインプロジェクターを新設してきました。現在日周孤目盛、地平線の方位目盛等の特殊投影機を検討しております。

展示に関しては、予算やスペースに制限があり、不十分な状態ですが、大きな星座ジオラマを小型新式の改良型に入れ替えたり、狭いフロアをフルに利用し、パネル、写真、模型を用いて、天文の原理、現象を容易に理解していただくよう努めております。当面の課題は視聴覚器機の導入ですが、今後も展示品の内容、展示方法共に、より興味あるもの、より充実したものにするよう努力していくつもりです。(増沢 等)

20 周 年 記 念 行 事

講演と映画の夕べ 4月28日

講演「惑星の世界」 国立科学博物館 村山定男氏

映画「太陽の活動」

天文クイズ 4月5日入館者

夏期観望会 8月9、10、11日

対象 星の会会員、千葉県鹿野山にて

望遠鏡取扱い説明会 夏休み中予定

20年の歩み 刊行

ヨーロッパ天文施設視察旅行

昭和53年3月6～20日

問合せ ☎ 03-407-7131(内)331

担 当 小田、小林

会 員 館 園 消 息

【人事異動】

徳島県博物館

新館長 竹原保次郎、旧館長 豊岡磊造

鳥取県立博物館

新館長 前田壽男、旧館長事務取扱 西尾優

岐阜県博物館

新館長 松尾克美、旧館長 小幡忠良

神奈川県立青少年センター

新館長 渡辺猛男、旧館長 大胡満寿男

【名称変更】

内藤記念くすり博物館

旧名称 内藤記念くすり資料館

 会 員 館 園 の 紹 介

岐 阜 県 博 物 館

所 在 地 ㊟ 501-32 関市小屋名 (岐阜県百年公園内)

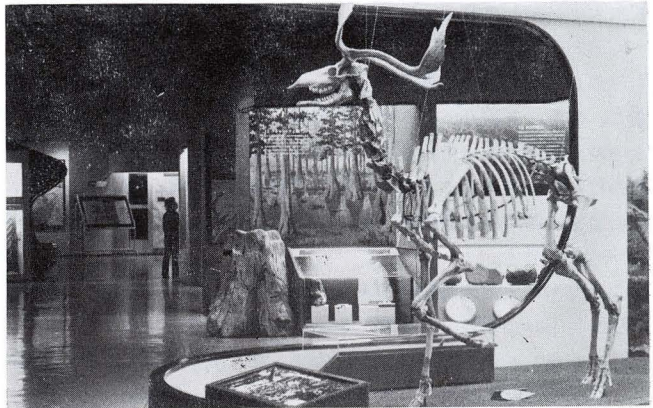
電 話 05752-8-3111 (代表)

休 館 日 月曜日(祝日を除く)・祝日の翌日,
12月27日から翌年1月4日まで

開館時間 4月～10月 9時～16時30分
11月～3月 9時30分～16時30分

交 通 名鉄美濃町線・岐阜バスとも「^{おや}小屋
^な」下車徒歩15分, (県百年公園北
口より入る)

入 館 料 小・中学生 50円, 高・大学生 100円,
一般 150円



自然展示室1「自然のおいたち」のコーナー

岐阜県博物館は、置県百年記念事業の一環として、面積約100haの岐阜県百年公園内に建設された総合博物館です。昭和51年5月5日に開館したばかりですが、初年度には約20万人の来館者がありました。

美濃平野部周辺を特色づけるアカマツ～モチツツジ群集を主とした丘陵地帯、その緑の自然環境によく調和した鉄筋二階建ての施設は、総面積約8,800㎡、展示室延面積約2,500㎡、収蔵庫7室、他に図書資料室、研究作業室、特別展示室、講堂、研修室等をもち、広く県民の学習の場となることを大きなねらいにしています。

1階に自然展示室、2階に人文展示室が、それぞれ2室ずつあり、飛山濃水の中ではぐくまれてきた郷土岐阜県の姿を、人文・自然両分野の諸資料によって公開展示しています。

玄関ホールに入ってすぐ左側の「自然展示室1」では、「郷土の自然とおいたち」をテーマに、まず岩石や化石により郷土の大地と生物の変化が展開され、山と川の二つの面から現在の自然の特徴、そしてそこに住む人と自然とのかかわりへと展示構想は流れています。

大型哺乳動物デスモスチルス類、オオツノジカなどのレプリカ、県内から豊富に産する各地質時代の化石、そしてブナの原生林のジオラマ、はげしい噴火・地熱と温泉・地下水と自噴・川の自浄作用などで動きをとり入れたポラビジョンによる展示など、最新の展示技術を豊富に活用しています。

「自然展示室2」では、「郷土のさまざまな自然」を大テーマに、郷土の特色ある動・植物・岩石・鉱物等を

15の課題ごとに紹介しています。「生物の系統」では、おし葉・液浸標本・写真・複製品等を配した一大系統樹模型が作られており、手すりにそって一巡すると、生物界の多様性が見られます。

「天然記念物」では、オオサンショウウオの生態ジオラマ、「鳥獣の保護」では、四季折々の鳥を音声と映像で展示、「軟体動物」では、陸貝の生体展示と県内産の陸貝・淡水貝全種の実物標本展示、「岩石」では、実物と偏光顕微鏡写真の組合わせ、「鉱物資源」では、ウラン鉱石と放射能検知装置、「ウとアユ」では鵜飼のジオラマ……と、それぞれの展示に最新の技術的工夫がされ、また展示に至るまでには県内の諸機関・団体・個人等の援助を得、それぞれの長年の研究調査が背景にあるのです。

小中学生を対象とした「郷土学習室」では、スライド・図書・実物標本等を整理し公開して、資料を手にして学べることを目指しています。また野外施設「自然観察のこみち」も整備され、季節折々の生きた自然の姿を親しみながら知っていただけるようになっています。

今後は、「生涯教育の場」として、館内外での教育活動の積極的な推進とともに、その背景となる資料収集・調査研究を深めることが大きな課題です。自然が変化に富み豊かであるのに、自然史科学の面では立ち遅れている本県であるだけに、自然史分野の博物館機能の充実へと意欲を燃やしています。

(学芸部自然係)